

ドラえもんが教えてくれる学校の役割

新年度に入り、新入生を迎えたというタイミングなので、子どもたちに学校という場がもたらす心理的成長についてお話ししようと思います。

さすがにアニメや漫画、映画を通してドラえもんを見たことがない人はいないでしょう(我が家では、毎年春休みにドラえもんの映画を観に行くことになっています)。このドラえもんを例にお話ししていきます。

ドラえもんのオチは2種類です。

1つは、ドラえもんのひみつ道具を独り占めして好き勝手使うことでひどい目にあうというものです。もう1つは、ひみつ道具をみんなで共有して(現実ではあり得ないほどに)仲良く遊ぶというものです。

ドラえもんのひみつ道具は万能です。ひみつ道具があれば、多くの願望は満たすことができます。ですが、これを好き勝手使うととんでもない目にあい、みんなで仲良く使うと平和な世界になる…そういうストーリーに基本的にドラえもんは作られています。

これらのストーリーには、学童期に子どもが身につけるべきことが暗に含まれています。

アメリカの精神科医であるサリヴァンは、児童期の子どもが身につけるべきものとして「妥協・協調・協力」であると述べています。子どもが自らの自分勝手な欲求のままに好き放題ふるまうのではなく、欲求を抑え(妥協し)、周囲と調和を取りながら協力し合って活動することが学童期に身につけることが大切なのです。

子どもは家庭だけで過ごしていると、どうしても「世界の中心に自分がいる」と感じやすいものです。そして、それは仕方がないことでもあります。例えば、子どもがいくら出しても食べない野菜を食卓に並べなくなるように、家庭では自然と「子ども中心の世界」になってしまう面があるのです。

こうした「世界の中心に自分がいる」という感覚を現実に近い形に修正する場として、学校は存在します。学校という多くの人と一緒に生活する場では、自分の好きにふるまえないことがあるのは当たり前ですが、そういう場に身を置くことで「世界の中心に自分がいる」という感覚に基づく欲求を抑え、周囲に協調し、協力し合うことを経験的に学んでいくわけです。

ドラえもんの「ひみつ道具という万能機を好き勝手に使うとひどい目にあい、仲良く使うと平和になる」という定型は、児童期の子どもたちが学校で経験的に学ぶことをそのまま表していると言えるでしょう。こうした経験を通して、好き勝手にふるまうこととは別の、社会的な成熟に伴う満足感(責任をもって役割を果たすこと、そういう自分を認められる体験、みんなで何かを達成するという経験など)を得ることができるわけですね。